

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載 ◆ 第24回/アール・デコ・ファッション—妃殿下のワードローブから

Residence of Prince Asaka 1933—



図1

宮邸建造の際に自らラジエーター・カバーのデザイン下絵を描くなど、芸術的素養を身につけていた朝香宮妃殿下は、おしゃれにも関心が強く、パリ滞在時にはファッション誌『ヴォーグ』を購読していました*1。普段から流行のファッションを身につけていた妃殿下の姿は、プライベートアルバムなどに見ることができます。

上の写真で妃殿下は、プリム(帽子の縁)が浅くクラウン(帽子の山)が丸いク

ロシェと呼ばれる帽子*2を被り、ローウェストで重なった裾が斜めにカットされたワンピースを着ています。靴は甲にベルトを



図2

通したデザインです。1920年代初頭のファッションを端的に表した装いといえるでしょう。

コルセットで絞ったウエストを強調した前時代のファッションとは異なり、この時代にはサテンやペロア、ニットなどの柔らかい素材を使用した、筒型のドレスが流行しました。直線的なドレスを身にまとうことで、逆説的に柔らかい身体のラインが際立ちます。リボンやレースといった付加的な装飾よりも、大きなドレープ(ひだ)や非対称なデザインなど、ドレスのシルエット自体に工夫を凝らすことがおしゃれとされました。ローウェストは1922年頃から広まっています*3。

シンプルになったドレスには、大胆な色彩とフォルムをもったアール・デコジュエリーが似合います。特に粒

の揃った真珠の連なる長いネックレス(ソワール)は、ローウェストのドレスによく映えたため人気があり、妃殿下も好んで着用していたようで、パリの宝飾店でお手持ちのネックレスに真珠を追加して長くさせているほどです*4。

細身のドレスを華やかに彩る毛皮のコートやケープも流行のアイテムでした。毛皮のケープをまとった女性の姿を、細長い軸に大きな傘をのせたキノコに見立てたユーモラスなイラストが、「当節のモード」として『ヴォーグ』に掲載されています。狐やテンの他、ラッコやオットセイ、山猫などがファッションに活用され、日本でも「今迄余り使用されなかつた動物なんかに、白羽の矢が立つて、動物の方でさぞかし大恐慌を来たしてゐる事でせう。*5」といわれたほどです。中でもパリの女性たちの間では黒カワウソやモグラの毛皮をポイント使いすることがエレガントとされており*6、妃殿下もモグラの毛皮で縁取りしたケープなどを購入しています*7。(八巻)

図1.パリ滞在中(1923-1925年)の朝香宮妃殿下と随員の女性たち(左が妃殿下)。当館蔵

図2.ジョルジュ・バルビエ《希望をお持ちになって》(ウォルトのイブニングドレス)「ガゼット・デュ・ボン・トーン」より1922年 ポシヨワール パリ市立プティパレ美術館 Photo©PMVP/Cliché:LADET

図3.制作者不詳《朝香宮妃殿下胸像》制作年不詳 大理石 当館蔵 真珠のネックレスをつけている姿は、肖像写真などにもみられる。



図3

*1.パリ滞在時の「受領証綴」より。当館蔵。受領証綴については、東横学園女子短期大学非常勤講師(肩書きは当時のもの)青木淳子氏による報告を参照した。

*2.日本でも流行し、洋装には欠かせないお洒落となった。モガ(モダンガール)と呼ばれる女性たちのアイコンの一つでもある。「お釜輪」とも呼ばれた。

*3.『新・田中千代服飾辞典』1991年 同文書院

*4.上記「受領証綴」より。

*5.『婦人画報』1933年1月号 p.224

*6. Anna Municchi, "Ladies in Furs: 1900-1940", Zanfi Editori, 1992 p.90

*7.上記「受領証綴」より。